

分析方法とのつきあいかた

前田 啓朗

広島大学外国語教育研究センター

ひとこと「分析」と言っても、その受け取られ方は様々です。コンピュータに入力された数値を統計的にいろいろ計算して「分析」することもあれば、自由記述の回答がずらりと並んだ紙を前にして調査対象者の意図を「分析」することもあります。あるいは、「現状を『分析』する」というように、測ろうとするものを決める・測る・解釈する、というような一連の手順を「分析」で表現することもあります。ものごとに対してどういうふうに見て・どういうふうに取り口をとって・どういうふうにかえるか、という広いものと捉えるのが安全かもしれません。

本稿のタイトルを「『分析』方法とのつきあいかた」としたのは、その広い意味をねらったからです。大修館書店の月刊誌『英語教育』が平成 22 年 5 月号で英語教育研究の特集をするにあたって、統計に関する原稿を 1 ページ、依頼されました。その折に書いたのが、右ページのもので、これは結局のところ没になりましたが、分量を 3 ページに増やして全面的に書き直すこととなり、いくつかの留意点を示しました。その記事や、関連する「統計的な分析」に関するものを参考文献に記します。あるとき、この没原稿を本報告書を発行する研究部会の部会長である水本先生のお目にかけることとなり、報告書への収録を打診されました。ただし、報告書全体としては、「統計的な分析」に焦点を絞ったものではなく、外国語教育研究を充実させるための方法論に言及するものです。そのため、広い意味での「分析」を意識したタイトルとし、追加でこのページを記すこととしたわけです。

右ページの原稿は、単に茶化した世間話にはとどまりません。たしかに 1990 年代後半からの「統計的な分析」への傾倒は、過熱したと思われる部分もありました。ただし、振り子が揺戻すことを思い描くまでもなく、「分析」の中でも違う種類の「分析」である「〇〇的な分析」が続く様子を想像するのは難しいことではありません。そして、「〇〇的な分析」をしたいであるとか、そうでなければ不適切であるなど、手段が目的になってしまっただけの本末転倒の繰り返しです。

いろいろな種類がある「分析」それぞれの手法をよく知ることは必要です。どのような方法を使うべきかを判断するとき、引き出しが少なければ適切な手段を見過ごしてしまうかもしれません。ただし、特定の手法を使うことが外国語教育研究の目的とは言えません。特定の手段や道具を使うことが目的ではないことは、「分析」をして研究する際に、留意しなければならないことだと指摘できます。

参考文献

三浦省五 (監), 前田啓朗・山森光陽 (編著), 磯田貴道・廣森友人 (著) 2004. 『英語教師のための教育データ分析入門—授業が変わるテスト・評価・研究』 大修館書店.

前田啓朗. 2010. 「授業改善・生徒理解のための統計とのつきあいかた」『英語教育』 59(2), pp. 34-36.

前田啓朗. 2010. 「統計用語の使い方」『英語教育』 59(8), pp. 48-49.

授業改善・生徒理解のための統計とのつきあいかた

前田 啓朗 (Maeda Keiroh)

ほんの 1 ページで、「統計に対して身構えている方々の肩の力を抜きつつ、最低限守らなければならない統計の掟を伝授する」という、光栄かつ無茶なご依頼をいただきまして、どうしたものかと思案しました。いろいろな挙句に今の職に至った過程で、傍目にはたぶん「英語教育の分野で統計に詳しい人」の部類に入っているわけでありまして、なんでこんなことになったのかと。

あのですね、統計とか、「笑」をつければいいと思うんですよ。そう、統計(笑)と。同様に、もう、研究者(笑)とか、論文(笑)とか。なんでもいいですよ、統計(仮)でも統計(ピャ)でも統計(・暮・)でも。そうすれば、肩の力も抜けるんじゃないかなと思うわけでありまして。

…それだけではだめですか。

筆者が修士課程の大学院生のときなのですが、時は Windows が 95 から 98 に移るころ。計算機が普及すると統計(笑)も普及してしまうわけで、これまで「そういうのは専門(笑)の人がやることだから」で避けることができていた統計(笑)の、環境が揃ってしまったわけです。

さらには研究者(笑)の分類に入る大学教員(笑)は、業績評価(笑)が厳しくなったせいで、論文(笑)の数が問題になったり。全国で大学院を設置や拡充して院生の数が増えたら「院生の発表件数は教員の指導力の指標となる」とか院生もやはり研究(笑)せねばとかいうことで、とにかく書いたり発表したり。まあこれは単に批判できるものではなく、独り考えて満足するだけではなくて世に問うことはいいことだと思うのですよ、もちろん。

ただし、計算機の普及と研究成果の発表の需要増によって、もうたいへん。何事も、急速に普及すると負の側面が出てきますよね。巨視的には、じきに収まるのかもしれませんが、微視的には、もうカオス。残念な統計(笑)の量産と、それを参考にした劣化再生産という地獄絵図。

そんな中で、もう、M2 だった筆者は呆然としたものです。それまで信じていた論文や研究者が、少なくない割合で、論文(笑)や研究者(笑)だった、と。たかが 23 か 24 歳の院生が自分で勝手に本を読んだり Web で調べたりした範囲で知り得たルールすら、破り放題。筆者は憤りが原動力になるという残念なタイプなので、それを糾すべく筆を執り…となったわけですが、特に初期は、残念な論文を世に送り出しました。その責は執筆者にあるのか、採択した査読者や編集者にあるのか、「残念ながら、研究者も査読者も編集者も、万能ではないのです」という、大人の事情(笑)のなせる業でもあり業でもあるのでしょうか。

残念な事例は、まだまだ後を絶ちません。学会誌をめくるときには、嘔いてお茶返せと思ってしまうかもしれず何も飲めません。投稿されたものを査読するときには、逆に、酒でも飲まない(略)。まあ、世の中ってそんなものですよね。現実ってつらいものですし、こんなものですよ。

数年前のある学会で、印象に残った発言がありました。残念な調査と分析をした発表者に、筆者が私淑する先生が挙手され、こうおっしゃった。「この研究で、子供の顔が見えますか」と。そういうことなんですよ。見たいことを見る。そのために必要な統計だったらやるけれど、統計(笑)が目的になっては意味がない。

本稿の読者である、英語教育・研究に携わる方々のほとんどは、教室で、英語の指導をなさっているわけです。研究(笑)のためではなく、授業改善・生徒把握のために研究をするのなら、目的に応じてデータを解釈する中で、必要が生じれば統計を援用すればよいのです。その際には、筆者も執筆に加わった、『英語教師のための教育データ分析入門』(編集部注：●ページ参照)が、はじめの 1 冊としてお役に立てるかもしれません。

(広島大学外国語教育研究センター 准教授)